

## 風景デザインレター from 九州(第 39 号)

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

正月早々風邪ひいて、体はしんどかったのですが、心的には、のんびりとした正月でした。昨年の 4 月から始めたこのデザインレターも次号は 40 号。そろそろ「風景」についてはネタ切れかなあと考えています。岡村さんのフォトメッセージ 100 号もまじか。そのあとどうされます岡村さん??

正月、うだうだ寝ながら読んだ本でしたが、結構、感銘を受けました。

### 【「風景はデザインできるか」に結論?】

2011 年最初の作品にふさわしいいい本であった。柳田國男、柳宗悦、宮本常一らと同様に、日本の姿をしっかりと考察した一人保田興重朗（やすだよじゅうろう）の紹介を兼ねて、彼なりに解説したもの。安田のことは全く知らなかったが、彼は、日本の美しさ、素晴らしさを、水田耕作による農にあると見る。そして、当然、日本がその基本とすべき風景、日本が誇るべき風景は水田風景を唯一のものとする。また、人間の最も幸せな生き方を、水田耕作による農業を営むことと見る。日本は、そのような水田耕作が可能な、つまりは水と気候と土に恵まれた場所であるこの国を、そして、その水田耕作のシステムがもたらす社会そのものが、唯一、争いごとのない平和な世界の実現できる場所として位置付けている。その流れのなかで生じることに、神の、あるいは自然に対する考え方の経験的・派生的なことにも触れている。よく言われるように、日本は無宗教であるが、無信仰ではない。日本に生まれた八百万の神々は、宗教の対象ではなく、信仰の対象となっている。この宗教と信仰の違いについては、キリストやイスラムのような一神教は、原則として神との契約により結ばれており、契約を破ることが罰として、つまりは天罰として下るというもので、このような形態を宗教として考えている。一方の信仰とは、自然そのものの存在はもとより、あらゆるものに神が宿するというほど、神

様はいろいろなところに存在し、ている。この多神教の世界は、民衆の行動に関する規定の原理も、宗教ではなく信仰によってなされ、信仰心が基本となって社会が成り立ってきたと解釈する。この信仰と宗教の違いは、その生きていくことの縛りを神への恐れとするか、神との契約とするかの違いで、この違いそのものが、すべての人間の生業や生活にかかってくる。つまり、西洋の神との契約というもの、神から一方的に押し付けられたこの契約は、どうみても自然と人間との契約になっているようではなく、ある特定の社会の人間にとって都合のいい、あるいは、その特定の社会をまとめていくために必要な契約のような気がする。そのためか、あるいは契約という行為の持つ一般的なことなのか、あらゆる事例に対して対応するためには、とてつもなく複雑になり、また、契約そのものの解釈の仕方で、判断が変わる。そのため、宗教戦争なるものが起きる。一方、日本の多神教の根本は、神への、つまりは自然への恐れということであり、自然がなすふるまいには、人間の意識や判断が入り込む余地はなく、おそれおののき従うことが基本であるが、自然がなすふるまいのおかげで、おいしいご飯（米）が食べられることに対する感謝の気持ちも当然大きなものである。そのため、できるだけ自然が暴れるときは、それをなだめるように自然と対峙し、また、豊作となった時は感謝の念を表す。このように、自然を畏れうやまうこ



とで、人間としての敬虔な立場がより単純化され、つまりは、問題を複雑にすることなく、かつ、すべての事象を感謝となだめ、そして崇りという恐れというもので包括される世界を構築する。このような考えのもとに構築された日本の世界は、民衆が、それこそ陳腐ないい方にはなるが、自然と美しい関係で共生して生きる姿を醸し出してきたということになる。これが、近代化という西洋の、狩猟社会の考え方、悪く言えば、略奪型社会の考えが入ってきて、農の美しさより、工の華やかさに魅かれ、日本本来の美しさを失いつつあるというメッセージである。

かつての親は、子供たちに、美しくない行為のことを、「みっともない」と叱っていた。この「みっともない」あるいは「だらしない」とは、表面的には、世間体という他者の目を気にする表現なのかもしれないが、効率や効果というものを最優先させるのではなく、ある空間への納まり方というものを表現しているのとも考えられ、その意味では、美しさとは、その「みっともない」の反対語である「きちんとしている」ということかもしれない。そして、連想ゲームではあるが、「きちんとした風景」というのは、やはり、水田風景を

想像する。もちろん、きちんとした街並みというものは考えることができるが、そこに先ほどから話している信仰心の深さを表すことにかけては、水田風景の比ではないだろう。

日本という国を神聖化することは当然に危険ではあるが、この日本の置かれた環境というものは、非常にすばらしいというか、やはり、人間が美しく生活するための空間、場所ということを考えると、特殊な位置にあると思わざるを得ない。10月の生物多様性の講習会でも話があった世界における生物多様性の重要なポイント「ホットスポット」に日本全体が指定されているということも、そのことを示している。

さてさて、だらだらとどうでもいい宗教観的な話を続けてきたが、ここで再整理をすると、日本の風景を考えるための基本原則は、西洋の景観デザインに見るような一点豪華主義のような発想でなく、場への敬虔な信仰が前提となった健全な生業から生まれてくる風景ということではないだろうか。日本のデザインは引き算のデザインであるという話は依然したと思うが、引き算するということは、人間と自然のかかわりが、よけいなもの雑草処理であったり、間伐であったりすることで維持されており、放置しない、ほったらかさないということで、つまりは、「きちんとする」ということである。

日本という国にもたらされている豊かな自然、繊細な自然というものを大切にし、そのうえで、最

もその価値を活かした生き方をすることが、日本の風景をより美しくすることになるのではないかとということである。

こう考えると、以前紹介した、柳宗悦の民芸の美の話に戻ってしまうようである。意図してデザインしたものの美しさは、どうしても欲のようなものが写し込まされてくることとなり本当の美しさにはなりえず、そうではなく、自然と美しい関係で共生している農の世界からこそ、美しい風景が生まれてくる。そこには、ダメなデザインあるいは洗練されたデザインという範疇を超えたより本質的な美しさ、これも以前書いたが、風景の健康美というものが、美しい風景を創り出すことができるのではないかと改めて感じる。

こんなことを書いていると、それではおまへは今の仕事を放り出して農業でもやるつもりかといわれるであろうが、悲しいかなそうは思わない。いや、思えない。それは、今自分の周りにもたらされている多くの価値を捨て去ることにもなるだろうから。

しかし、日本の風景の原点が、あるいは、帰着すべき風景が、農の風景にあることはまちがいないのではないだろうか。

そろそろ、このシリーズも一つの結論を出すべきループに入ってきたようである。最初に問題提起した「風景はデザインできるか」ということに対しては、やはり、日本の風土に基づいた健全な信仰と、それに基づく営みがなされない限り、風景そのものは美しくな

りえなく、単体の工業デザインのように、風景そのものをデザインすることはできない。空間のデザインは、それが限定的な空間である場合には、美しさを見出すことができるかもしれないが、その領域を開放した風景という枠の中では、日本人のあるべき、あるいは納まるべき生業そのものが風景の中の存在にならない限りは、風景の健全化はなしえない。特に、今のように、風景から隔離された、あるいは風景を無視した生業で生きている限りは。

それが、本当に、農を中心とした世界に戻らなければいけないのか、あるいは、水田耕作の歴史の中で培われた自然への信仰というものを別の形、形態、システムで、風景の中で生きていくという関係の社会を作り上げることができないものかはよくわからない。保田は、農の社会に戻るしかないといっているようであるが。

少なくとも今の時点では、農の時代に戻るということはある程度ないと考えられるため、それではどうするかが、風景デザインのための出発点になるのではないか。結局、出発点に戻ってきてしまった。

今回は、第40号ということになるが、ここいらへんが一つの区切りのような気がする。

#### (お知らせ)

次々回(41号以降)は、岡村さんのフォトメッセージ100号記念に便乗させてもらい、なにか、コラボ的な企画としたいと思います。岡村さんよろしくお願ひします!!!【続く?】